

藤田富士夫

(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

本稿に掲げた図面を書斎に埋もれた古封筒の中から発掘した。大学を出て間もない頃に作成したもので 30 年は経ている。その昔、某会誌に投稿したがボツとなった原稿に添えた図である。その時の原稿を探したが見当たらない。図もほかに数枚作成したはずだが見当たらない。それでも論旨の課題は、ずっと頭にあって今でも継続している。肩の張らない「余話」コーナーに甘えて旧稿を最構成することとした。新資料を加えて図を作り直すとも思ったが最近細かな作業をする気力が無い。古図であるが基本的構想は変わらない(つまり進歩が無いといったことでもあるが)のでお許しいただきたい。

擦切技法の波及論

擦切技法について八幡一郎博士の先駆的研究がある。1936 年に発表された「東京人類学会日本民族学会連合大会第一回記事」である。この時の「石斧における擦截手法」と題した発表稿は、名著『日本の石器』(八幡 1948 年)に収録された。擦切技法による「磨製石斧は北海道全土特に渡島半島附近に多く、また内地では陸奥及び羽後に多く発見される」とし、「現在知られている範囲では、擦截による石斧の分布の西南端は飛騨である。北海道および奥羽北部の擦截石斧の原料は十中八九までグラウコフェンシストと呼ばれる濃緑色堅緻の石である」と書き、擦切技法とグラウコフェンシストとの密接な関係を力説する。そして中部、関東においては同じく緑色をおびる蛇紋岩が選択されているとする。このような分析から、擦切手法の源流はシベリアの青緑色のネフライト製磨製石斧にあって、グラウコフェンシスト製の北海道、奥羽北部は第一次分布、蛇紋岩製の中部、関東は二次分布したと壮大な波及論を展開した。

かかる擦切技法の波及論にそって寺村光晴博士は硬玉製大珠を検討した。「嘗って大珠の解体、分割に際して用いられたと言われた截切手法は、原石より大珠製作に際しての整形の過程における一工程としてなされた」(寺村 1965 年)とし、①有孔飾玉類にみられる穿孔技術の発達・盛行、②文様に顕示される竹管状具の盛行、③堅緻な石材を対象とする擦切技術にみられる媒材使用の盛行、この三者が時期的地域的に合致する新潟県西南部、富山県北東部に硬玉使用が始まったと説いている(注 1)。

また、金子拓男氏は斜刃石斧と擦切技法の関係を説いた(金子 1969 年)。石川、新潟、長野県出土の斜刃石斧 9 点を集成し、「刈羽貝塚のものは別として、図示した八個の石斧は古くは中期初頭の剣野 E 式、下っても中期中葉の馬高期を下限とすることが知られるのである」とし、「斜刃石斧と擦截技法とは密接不可分の関係であり、斜刃石斧が擦截技法によって」作られた、と説いた。八幡一郎博士の論旨に沿って、「斜刃石斧及び擦切石斧は東北文化流入にともなって新潟県に伝播したのであろうし、又その時期は中期初頭を上限とする時代であったとの可能性は強い」とした。

もう一つの擦切技法

一方、次に記すように八幡一郎博士による波及論のパラダイムに乗らない例もある。

a. 早期の擦切技法 栃木県の普門寺遺跡に見られる(酒詰・渡辺 1949 年)。これは生前の山内清男博士から教示を得た。本遺跡では厳密な分層発掘が行われており、「未成擦切石斧かと思われる」石器が「最下層にちかい」位置から出土した。最下層には無文土器があり、次いで撚糸文、そして押型文が出土している。山内博士は、本資料に高い信頼性を寄

せておられた。ほかに新潟県の小瀬が沢洞窟で「胴に縦の擦り截れ痕跡を研ぎ残している」(中村 1978 年)石斧がある。これは早期押型文に伴ったと見られている。

b. 縄文前期の擦切技法 縄文前期後葉～末葉の土器を出土する富山県立山町の吉峰遺跡では小型の蛇紋岩製磨製石斧の製作に普遍的に擦切技法が認められる(第 1 図 1～4)。また中期初頭以降とされる斜刃石斧(第 1 図 5)が出土している(なお 1～5 はいずれも筆者の表採資料である)。また、岐阜県国府村の村山遺跡(塩谷・大野 1960 年)は縄文前期の黒浜式から十三菩提式併行期の遺物が発掘され、諸磯 a. b 式や北白川下層式併行の土器が豊富である。伴出土器は判然としないが擦切痕跡のある石斧と未成品が出土している(第 1 図 6・7)。石質は、6 が緑色変成岩で 7 が結晶片岩と報告されている。

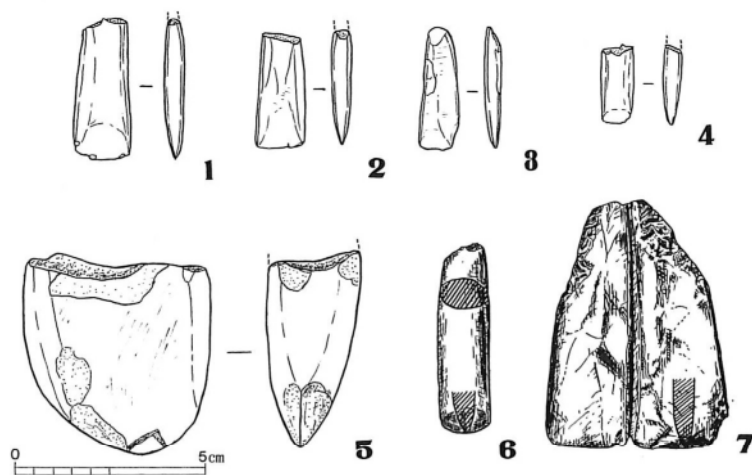
このように少なくとも富山から飛騨地域にかけての縄文前期には、蛇紋岩やその類似岩の石斧への擦切技法が普遍的に存在している(注 2)。

c. 玦飾の「切目」作出 縄文早期末葉～前期初頭に現れる玦飾[いわゆる玦状耳飾]の切目作出に擦切が用いられている。製作遺跡は北陸に集中しており、富山県の極楽寺遺跡や明石 A 遺跡、天林南遺跡、新潟県青海町の大角地遺跡などがある。素材には滑石やロウ石が用いられている。ちなみに縄文前期後葉には蛇紋岩製玦飾が出現する。玦飾の滑石、ロウ石と擦切石斧の蛇紋岩は、いずれも姫川中流域の蛇紋岩地帯に産出する。玦飾製作遺跡の分布と重なって擦切痕跡を有する蛇紋岩製石斧の製作遺跡が盛行する。

d. 鹿角製品の加工 鹿角製品の第一次加工に擦切技法が用いられている。このことは早くに桑山龍進氏が指摘している(桑山 1943 年)。鹿角製品それ自体は草創期から認められており、たとえば草創期後半の神奈川県夏島貝塚から鹿角製の釣針など良く知られている。桑山氏の指摘に従えば、これも擦切技法による製作の蓋然性が高い。

※これらの事例から、仮に八幡一郎博士による波及論が成立するとすれば、北陸へは東北で盛行する縄文前期段階にはすでに到達していることとなる。つまり擦切技法の東北から北陸への段階的波及論ではうまく整理できないように思われる。

a～d に示したように八幡博士が指摘する擦切技法の波及以前に縄文列島では擦切技法が普遍的に用いられていた。たしかに早期の北海道や東北では典型的な擦切石斧が存在する。しかし、また飛騨から富山では前期後葉に擦切技法による石斧が存在する。それらの



第 1 図 立山町吉峰遺跡 (1～4. 小型磨製石斧) (5. 斜刃石斧)
岐阜県村山遺跡 (6～7. 擦切石斧、塩屋・大野 1960 年より)

石斧には新潟県姫川流域の蛇紋岩地帯の原石が多用されている。姫川流域とその周辺地域では、前期後葉の玦飾に蛇紋岩の使用が始まる。

当地における擦切技法による蛇紋岩製石斧の生産は、北海道や東北地域の擦切技法の波及とは異なって、玦飾生産における技術が蛇紋岩素材加工へと転用されて開始されたとする仮説は検討に値しないだろうか？ 擦切技法が一元論で解釈できるのかそれとも多元論なのか？ 大局的視野で、かつ多様性を踏まえての議論が必要であると思われる。

おわりに

ここに古図の発掘を機に、当時の思考そのままに進化することなく書きつづった。突飛かもしれないが北陸の磨製石斧擦切技法に、同地域に先行した玦飾文化の擦切技法の影響があると推考している。この突飛さがかつてボツとなった理由だとも承知している。それでも、なおこの関係に拘泥するのは前期の玦飾製作文化圏と中期の蛇紋岩製石斧製作圏とが同域で重なり合うからである。「擦切技法」の理解は、北陸の縄文文化論を展開する上で避けて通れない課題であるとも思っている。それは、これからも私の頭の中に未消化の課題として残りつづけていきそうである。大方のご批正とご教示を頂ければ幸いである。

注1) その後、寺村光晴博士は新潟県青海町の寺地遺跡の硬玉の攻玉技術を考察し、「本地方にみられる擦切技法は、現在のところ蛇紋岩においてのみ検出されている(337頁)」(寺村ほか1987年)としている。また、寺地遺跡では硬玉への擦切技法の実施は認められていないとも説いている。鈴木克彦氏は、青森県川内町野家遺跡の硬玉製大珠は擦切技法で「半截」されていると指摘している(鈴木2001年／48頁・53頁)。また、青森県三内丸山遺跡の緒締型大珠の中に鯉節型大珠を横位で輪切りしたかのようなものがある(同50頁)。現状では、硬玉製大珠と擦切技法との関係は青森県や岩手県(御所野遺跡)で僅かに認められるが普遍的ではない。原産地から遠く離れた東北地域に限定的に見られる現象の感がする。

【訂正と留意—『火炎土器と翡翠の大珠』(鈴木2001年)に掲載された富山市教育委員会(富山市考古資料館)蔵の「翡翠大珠」【40頁112】に擦切痕が認められる。これについては同書【39頁108】および【40頁113】とともに、近年製作された「参考品」が誤って貸し出されたことによる。また3点ともに「富山県」出土とあるが事実でない。なお、このことは資料を借用され図録を編集された青森県立郷土館の責任ではない。機会があれば経過について記したいと思っている。—】

注2) 縄文前期後葉の富山市平岡遺跡でも蛇紋岩製の小型磨製石斧の製作に擦切技法の痕跡が確認できる(婦中町1997年)。

注3) 八幡一郎博士は、1936年の論考で「前期ないし中期の遺跡からしばしば発見される玦状耳飾の切目が、この(擦截)手法によっていることなども興味がある」(八幡1979年)としているが、その後の擦切論では触れられていない。

参考文献

- 金子拓男 1969年「中部地方における斜刃石斧と擦截技法」『古代文化』第21巻第3・4号 古代学協会
桑山龍進 1943年「日本新石器時代の鹿角の於ける加工技術」『民族学研究』第1巻第6号
酒詰仲男・渡辺仁 1949年「栃木県菱村普門寺遺跡発掘概報」『人類学雑誌』第61巻第1号
塩屋雅夫・大野政雄 1960年『村山遺跡』斐太中央印刷株式会社
鈴木克彦 2001年『火炎土器と翡翠の大珠—土の芸術、石の美、そして広域交流—』青森県立郷土館
寺村光晴 1965年「硬玉製大珠論—源流と攻玉技術と文化—」『上代文化』第35輯 上代文化研究会
寺村光晴・青木重孝・関雅之 1987年『史跡 寺地遺跡』新潟県青海町
中村孝三郎 1978年『越後の石器』学生社／83頁。
婦中町 1997年『婦中町史 資料編』／9頁。
八幡一郎 1948年『日本の石器』彰考書院
八幡一郎 1979年「日本新石器時代初期の石器」『八幡一郎著作集 第二巻縄文文化研究』雄山閣